

『うつほ物語』の実忠と「平中」——近江に関連する共通語彙を中心に——

Sanetada of the Tale of the Hollow Tree and Heicyu: Focusing on Common Vocabulary Related to Ōmi

内 藤 英 子

NAITŌ Eiko

キーワード：志賀寺・浜千鳥・山彦

はじめに

『うつほ物語』の源実忠は、藤原仲忠百五首、あて宮九四首に次ぐ六七首の和歌を詠み、その和歌の表現が、物語の展開を牽引しているため、実忠物語は歌物語的とされている。特に、「鳥の喩」が多く見出し、妻子を連想させる「巢」や「雛」という表現が共有されて展開している⁽¹⁾。実忠はあて宮求婚者の中でも物語全体に登場する主要人物で、あて宮を思い続け、「人物造型が平板」とされるが、どこか「喜劇的色彩が濃厚」な人物⁽²⁾とされ、実忠物語は『うつほ物語』長編化の一つの軸になっている⁽³⁾。

『平中物語』の主人公「平中」は、『古今集』との共通歌五首の作者表記から、平貞文とわかる。本稿では、平貞文の人物像をその歌と『平中物語』を中心にしてとらえ、説話にみられる平中好色滑稽譚は含まないことにする。『うつほ物語』全体では、『平中物語』第二段の内容が二度引かれている⁽⁴⁾。

本稿では、実忠が「近江」に関わりの深い人物として設定されていることを、実忠が物語前半で近江の志賀寺に二度参籠する場面と、平貞文の和歌や『平中物語』との共通語彙「浜千鳥」や「山彦」を中心にして明らかにし、その設定の意味を考察したい。

一 志賀寺での実忠と「平中」

あて宮求婚譚は、藤原の君卷から、あて宮巻であて宮の東宮入内が決するまでの求婚者たちの物語である。その中のあて宮求婚歌群には、求婚者たちが「恋の歌として詠みつがれてきた地名」を折にふれ旅に出て詠んだ歌がある⁽⁵⁾。求婚者たちの旅は歌を詠む契機にもなっている。求婚者の一人実忠は、普段はあて宮の父源正頼邸に居続けているが、あて宮求婚譚の中で二度ほど志賀寺に参籠している。

例の宰相、志賀に詣でたまひて、それよりかくなむ。「日ごろは山籠りしてなむ。」

① (実忠) 憂きことを思ひ入るとはなけれども深き山辺をいく
ら見つらむ」

みぢ葉

とあれど御返りなし。

(嵯峨の院①三〇一)

と聞こえたまへり。あて宮

② (あて宮) いく返り数おく露のときの間に積もれる山に見えは
頼まむ

(藤原の君①一七五)

藤原の君巻で、実忠は近江の国にある志賀寺に最初の山籠りをしている。左大臣源季明の三男である実忠は、兄二人が源正頼の婿になっていることから、正頼の娘あて宮の有候補とも言えるが、実忠自身は、正頼から結婚の承諾を得るのは難しく、あて宮に懸想文を送ることも軽々しいと思ひ様子で最初の紹介場面に描かれている。実忠歌①はあて宮への思いでつらい心の状態を「深き山辺」に入りこむようだと詠んでいる。あて宮歌②は一見すると実忠歌と対応していないように見え、「露」を「塵」の誤りとする説もある。だが、実忠歌の「見つ」に「満つ」が掛けられ、さらに「水(みづ)」が響いているとすれば涙が暗示されて「露」と結び付き、「露」は海であれば潮のように満つ可能性もあるが、「塵」のように積もって「山」になることはなく、あて宮の実忠の懸想を拒む思いが詠まれている。このあと、実忠は、あて宮との仲介者兵衛の君に、山籠りはあて宮への恋心を忘れるための祈願で、心が平靜でなければ宮仕えはできないと語っており、この発言は、後に実忠が遁世することを暗示している。ここで注意したいのは、実忠の山籠りをしたのが「志賀」の地であることで、志賀は琵琶湖の西に位置し、群鳥の名所で、この地には後に実忠の妻子が身を寄せることになる。

源宰相、志賀に行ひしに詣でたまへりけり。それよりおもしろ
き紅葉の露に濡れたるを折りて、かくなむ。

③ (実忠) わが恋は秋の山辺に満ちぬらむ袖よりほかに濡るるも

嵯峨の院巻でも、実忠は、再び志賀寺に仏道修行のために参詣している。③歌は「みぢ葉」が露に濡れて紅に染まっているのは、あて宮を思つて流す紅の涙で満ちた袖から漏れたためだと詠まれている。また、③歌は東宮から始まるあて宮求婚歌群の中にあり、次に位置する求婚者は仲澄となっている。①歌と③歌で共通する「山辺」は、あて宮入内後に実忠があて宮に贈つた長歌にも詠まれている。「山里に一人眺めて もえわたる 深き山辺と みつ潮は 袖の漏るまで たたへども」とあて宮への思いが消えないことを詠んでいる。この長歌は①歌と③歌をふまえて詠まれ、①歌とは「深き山辺」と「見つ」が共通語で、「見つ」には「満つ」が掛けられているのも同じである。また、③歌とは「山辺」が共通し、③歌の歌意を長歌では「袖の漏る」と表している。

志賀寺(別名「志賀山寺」)は、近江国の琵琶湖の西、比叡山と長等山の間にあつた山寺で、崇福寺の別名である。天智天皇が霊夢により創建し、平安初期までは歴代天皇の帰依を受けて栄え、十大寺に列したが、平安中期以降たびたびの火災で衰運をたどり、十三世紀までに廃寺になっている。『枕草子』一九五段に「寺は、壺坂。笠置。法輪。霊山は、釈迦仏の御すみかなるがあらはれなるなり。石山。粉河。志賀。」と最後に挙げられ、『梁塵秘抄』にも「験仏の尊き」寺の一つとして挙げられている。志賀という土地に関しては、『蜻蛉日記』下巻天禄三(九七二)年二月に、源宰相兼忠の娘が産んだ兼家の娘を道綱母が養女として引き取る場面があるが、その娘は「志賀の東の麓に、湖を前に見、志賀の山をしりへに見たるところ」で心細く育つたと記されている。志賀は、眼前に湖が広がり、背後には山が連なる風光明媚な土地であつ

たことがわかる。

『平中物語』において「志賀寺」は、第七段と第二十五段、第三十段にみられる。まず、第七段をみたい。この第七段には、「志賀寺」、「群鳥」と「巢」など鳥に関する言葉、「山彦」といった実忠物語との共通語彙がみられる。

さて、この男、志賀寺にまうでて、二月に行ひけり。かかるに、この男の局の前に、女ども立ちさまよひけり。……女ども、みないでければ、隠れるたるところに、この男、かくいひやる。

④（平中）群鳥の騒ぎ立ちぬるこなたより雲の空をぞ見つつながむる

とある返し、女、

⑤（女）はかなくて騒ぎ立ちぬる群鳥は飛び帰るべき巢をぞもとむる

男、返し、

⑥（平中）巢を分きてわが待つものを飛ぶ鳥のなにか行方をさらにもとむる……

また、男、

⑦（平中）問ひければ答へける名をささなみの長等の山の山彦もせぬ

こたみは、返ししたり。

⑧（女）ささなみの長等の山の山彦は問へどこたへず主しなければ

平中は、修二会のため志賀寺に参詣している。志賀寺は琵琶湖の西にあり、鳥の飛来が多いからか、平中は④歌で若い賑やかな女たちの様子を「群鳥の騒ぎ立ちぬる」と喩えている。女の⑤歌の「はかなく」は、男と女が同じ局にいながら何事もなかったことを暗示し、平中の

『うつつは物語』の実忠と「平中」（内藤英子）

消極的な性格がわかる。平中歌⑥では、鳥の雌雄は、巢の中に、互いの居場所となる空間を分けるという習性を「巢を分きて」と詠み、女たちを受け入れる用意があることを詠んでいる。平中歌⑦の「ささなみの長等の山の山彦もせぬ」について、「ささなみの」は、琵琶湖周辺の地名や湖水に関連する言葉にかかる枕詞で、「長等の山」にかかっている。「長等の山」は、大津市、三井寺の背後にある山で、志賀・近江の歌枕である。下句は、山彦は折り返し答えただけはするの、女は返事もしないと女を責めている。女の⑧歌は、平中の下の句をそのまま繰り返し、山彦に寄せた応酬となっている。第五句の「主しなれば」は、山彦はもともと反響にすぎず、実体のないことをふまえた表現で、平中の相手になるような女性はいないと拒否している。

第二十五段については後述するが、「また、この男、志賀へとてまうづるに」と始まり、志賀寺参詣の道中で女性たちとの出逢いとその後が描かれている。第三十段は、「また、この男、仏に花奉らむとて、山寺にまうでけり」と始まり、隣に住む「をかきたはぶれごといひかはす」女性と山の紅葉に関わる歌の贈答をしたという話で、この「山寺」は志賀寺と考えられる^⑥。この場面で詠まれた平中歌「散るをまたこきや散らさむ袖ひろげひろひやとめむ山の紅葉を」は、濃い山の紅葉と袖が詠まれ女性を誘う歌だが、実忠歌③は、「もみち葉」が紅に染まったのは袖から漏れた紅涙によると、悲痛なあて宮への思いが詠まれている。志賀寺付近の山々が紅葉の美しかったことを詠んでいる点は共通している。このように、平中にとって志賀寺は、信仰の場であるとともに、女性との出逢いと交流の場でもあった。

二 志賀寺参詣の意図

次に、他の文学作品において「志賀寺」がどのように描かれている

かを検討するため、まず、和歌の詞書にみられる用例をみたい。

穂積皇子に勅して、近江の志賀の山寺に遣はず時に、但馬皇

女の作らず歌一首

⑨ 後れ居て恋ひつつあらずは追ひ及かむ道の隈廻に標結へ我が背

(一一五)

志賀の山越えに女の多くあへりけるにのみてつかはしける

貫之

⑩ 梓弓はるの山辺を越えくれば道もさりあへず花ぞ散りける

(春下・一一五)

思ふことはべりける頃、志賀に詣でて

⑪ 世の中を厭ひがてらに來しかども憂き身ながらの山にぞありける

(雑三・一二三三三)

『萬葉集』卷二に但馬皇女の作として志賀山寺にまつわる⑨歌がある。但馬皇女は、異母兄高市皇子に嫁いだが、同じ異母兄で年齢の近い穂積皇子を慕い、お互いに思いあっていたが、表向きは結ばれない関係であった。⑨歌には穂積皇子が志賀山寺に遣わされたときに、後を追おうとする悲痛な女心が詠まれている。男女の性は逆転するが、結ばれることのない悲痛な思いという点では実忠の思いに通じるものがある。『古今集』には、「志賀」の地名が五首詞書にあるが、その内四首が「志賀の山越え」とあり、あと一首は「志賀」からの帰途に詠まれている。⑩歌の詞書の「志賀の山越え」は、京都の北白川から滋賀へ越える山道を意味し、志賀寺への参詣が盛んに行われていたことがわかる。五首の部立は、春二首、秋・冬・離別歌各一首である。『後撰集』には、⑪歌の一例のみがある。「ながらの山」に「憂き身ながら」と滋賀の名所である「長良山」を掛けている。「世の中」は、世間の意味にも男女間にもとることができ、「厭ひがてら」とは俗世を逃れることを

もう一つの目的として志賀にやって来たが、ここもまたつらいわが身そのままの長良の山であったと詠まれている⁽⁷⁾。

次に、歌物語にみられる用例をみる。『伊勢物語』にはなく、『大和物語』の二つの段と、前述した『平中物語』の三つの段にみられる。『大和物語』は二段とも藤原千兼の妻であるとしこが志賀寺に参詣した時の話である。百二十二段がとしこと比叡の法師増喜君との逢瀬の話で、百三十七段は、元良親王が「志賀の山越の道に」作った別荘をとしこが訪れ、「かりにのみ来る君待つとふりいでつつ鳴くしが山は秋ぞ悲しき」と歌を詠んだ話である。「しが山」の「しが」には「志賀」と「鹿」が掛けられている。

作り物語においては、『うつほ物語』より後の作品には見出せないが、これは、志賀寺が度々炎上したことに関係していると考ええる。ここで、平安末の作品ではあるが、藤原俊成の『古来風林抄』にある志賀寺が舞台となった古歌にまつわる伝承をみたい。宇多天皇の京極御息所が、「昔三井寺の傍に志賀寺とて、殊の外に験したまふ所」があるというので参詣した。道中、志賀寺周辺の景色の素晴らしさを見るために牛車の物見の簾を開けたところ、琵琶湖の岸にある貧しい草庵に住む老法師と目が合い、その老法師が御息所との面会を望んだため、御息所は御簾をあげて会い、その手をとった。老法師がそのことに感激して詠んだ歌が、伝承された古歌で、志賀寺の靈験譚とも読める。平中と宇多天皇の生きた時代はほぼ重なり、前後関係は不明だが、『大和物語』や『うつほ物語』が成立した頃までは、靈験あらたかな志賀寺として女性も熱心に参詣する寺であったことがわかる。当時、山寺に参籠することは「純粹な宗教的意義の他に、現世浄土的な意識から、遊樂社交の時所を提供する結果」になっており、殊に志賀寺への道中には、関の清水など歌枕となる名所が数多くあった。しかし、平中は「求道

の志」も浅くはなく何度も志賀寺参詣をしており、そのために、志賀寺参詣にまつわるエピソードもいくつか残すことになった^⑧。『平中物語』第一段にすでに「求道の志」は語られている。

この男はた宮仕へをば苦しきことにして、ただ逍遙をのみして、衛府司にて、宮仕へも仕うまつらずといふこといできて、官とらせたまへば、世の中も思ひ憂じて、憂き世には交らばで、ひたみちに行ひにつきて、野にも山にも交りなむと思ひつれど、……

平中は、一人の女を名門の若い貴公子と争い、女は平中になびいたが、貴公子の嫌がらせなどにより宮仕えを苦しいものと考え、逍遙ばかりして宮仕えしないために官が剥奪され、さらに世間がつかくなつて、仏道修行に励み山林に分け入ろうとしたことがあった。このあたりの平中の人物像は、あて宮への思いで平常心が失われ宮仕えに身が入らない実忠と重なっている。

さらに、実忠物語において、近江の志賀寺に身をおくことは、祈願や仏道修行に専念するという意味だけでなく、実忠は平中とは異なりその身分が宰相と高いため、政権を離れて身をおくという意味もあるのではないだろうか。近江の志賀は畿内ではなく、畿外ではあるが、志賀の地は、都のある山城国と近江国の国境にあり、畿内と畿外の接点的な位置にある。実忠は、あて宮の求婚者の中で最初の求婚者であり、左大臣の三男で宰相という官位ともに有力な求婚者であったが、あて宮への思いがかなうことはなく、政界とは常に一定の距離をとっている。また、実忠の志賀寺参詣は突然で、あて宮の同母兄仲澄のかなわぬ恋が描かれた直後に記されている。後に描かれる実忠妻子の物語を取り込むために、志賀寺参詣は後から加えられたとする説もある^⑨が、仲澄と並べられることで、仲澄と同様になわぬ恋であることが暗示されているのだろう。二度目の志賀寺参詣で詠まれた実忠歌の次に位

『うつほ物語』の実忠と「平中」（内藤英子）

置するのは、仲澄の歌でこれも意図的な配置ではないだろうか。実忠は、あて宮入内後、北の方との復縁が試みられ、政界で中納言になった後も、小野に引きこもって仏道修行に熱心に取り組み、それ以上の権力を望まない。小野は山城国比叡山の西坂本にあり畿内に位置しているが、山を越えれば近江国となり、この土地も畿内と畿外の接点と言える。実忠は、畿外の志賀、畿内の小野と国境に拠点を持ち、一貫して政界とは一定の距離をとり、仏道修行に励むのが特徴的で、宮仕えや出世には全く興味がなく、あて宮への恋心だけを長く持ち続けている。

三 浜千鳥

近江の志賀寺付近は目の前に琵琶湖が広がり、鳥と関わりが深い。実忠物語においては、「鳥の喩」が多く用いられているが、それは近江という土地と実忠との結びつきが強いことを意味する。浜千鳥を詠んだ歌が、『うつほ物語』全体では四首あるが、実忠関連で三首と国譲巻での仲忠の歌の一首で、「浜千鳥」と実忠は結びつきが強いと言える。その意味について考察したい。

宰相、めづらしく出で来たる雁の子に書きつく、

⑫（実忠）卵の内に命籠めたる雁の子は君が宿にてかへらざらなむ……

兵衛、賜はりて、あて宮に、「巢守になりはじむる雁の子御覧せよ」とてたてまつれば、あて宮、「苦しげなる御もの願ひかな」とのたまふ。
（藤原の君①一三七）

宰相は実忠で、藤原の君巻であて宮の裳着が語られた後、初めて求婚する人物として登場する。⑫歌は、『うつほ物語』内での実忠初出歌で、「雁の子」は「卵」で、実忠自身が喩えられ、「卵の内に命籠めたる」はあて宮が幼い時から思いをかけてきたことを意味し、下の句の「か

へる」に「卵が孵化する」意味と「帰る」を掛け、いつまでもあて宮のそばにいたいという気持ちを訴えている。あて宮の侍女で乳母子である兵衛の君の発言にある「巢守」とは、まだ孵化しないで巢に残っている卵のことで、あて宮のそばに居続けている実忠を喩えている。実忠歌⑫にあて宮の返歌はないが、孵化すべき卵に対して実忠が歌の中で「かへらざらなむ」と願ったことに対する「苦しげなる御もの願いかな」という発言により、あて宮は『うつほ物語』内で初登場する。この初出歌⑫とその後の会話には、今後の実忠物語の鍵語となる「命」と鳥に関する言葉「雁の子」「巢守」があるが、この時点では、実忠に「帰る」べき「巢」である家庭と妻子のあることは示唆されていないと考えている。

実忠に続き、藤原兼雅と平中納言があて宮に和歌を贈るが返歌はなく、実忠はあて宮への贈歌四首めにして物語内で初めてあて宮から返歌をもらう。

⑬ (実忠) 浦せばみ跡かはしまの浜千鳥ふみやかへすと尋ねてぞかく

⑭ (あて宮) 浜千鳥ふみ来し浦に巢守子のかへらぬ跡は尋ねざらなむ (藤原の君①一四六)

実忠歌⑬の「跡」は千鳥の足跡に、文字、手紙の意味を響かせ、「川鳥」に「交はし」、「踏み」に「文」、「書く」に「斯く」が掛けられた技巧的な歌であて宮からの返事を期待した歌となっている。あて宮歌⑭は、実忠の⑫歌と⑬歌の二首をふまえた返歌で、「踏み」に「文」、「孵らぬ」に「返らぬ」が掛けられ、「浜千鳥」を実忠に、「巢守子」をあて宮に見立てて、実忠の懸想を拒む返歌となっている。この二人の贈答歌では「浜千鳥」「跡」「ふみ」が縁語であることが共通している。「浜千鳥」が詠まれたのは、実忠が「川鳥のいとをかしき州浜に、千鳥の

行きちがひたる」様子などを作ったためであるが、「浜千鳥」や「州浜」は、「近江国」琵琶湖の「浜」をも連想させる。しばらくして実忠が山籠りしたのが「近江国」の「志賀」の地で、そこは琵琶湖の西に位置している。

次に、菊の宴巻で正頼が撰津の国難波に上巳の祓に行った時に詠まれたあて宮求婚歌群にある実忠歌にも「浜千鳥」が詠まれている。

源宰相、波の競ひて群鳥の立つに、

⑮ (実忠) 浜千鳥友を連ねて立ちぬるはよるよる波の打てばなりけり (菊の宴②八二)

実忠歌⑮は、難波という浜辺での詠歌のため、「浜千鳥」は情景から連想されやすい歌語であるが、この場面で「浜千鳥」を詠んでいるのは実忠だけである。実忠は、近江だけでなく、近江に存在する琵琶湖に群れる「鳥の喩」との結びつきも強いからであろう。

『後撰集』恋二には、「浜千鳥」の詠まれた歌が一首だけあり、それが平貞文による歌である。

人を思ひかけてつかはしける

⑯ 浜千鳥たのむを知れとふみそむる跡うち消つな我を越す波 (六九五)

⑰ 歌の「浜千鳥」は、砂浜に残った鳥の足跡を筆跡に喩えている⁽¹⁰⁾。また、『伊勢集』には平貞文と伊勢との「浜千鳥」が詠まれた和歌の贈答がある。

同じ女、年来、言ふともなく言はずともなき男ありけり。かへりごともしせざりければ、「年経にけるを、なか『見つ』とだにのたまはぬ」とはべりければ、この女、「みつ」となむ名をば付けたりける。たちかへり、男

⑰ たちかへりふみゆかざらば浜千鳥跡見つとだに君言はましや

かへし

(一九)

⑱年経ぬること思はずは浜千鳥ふみとめてだに見べきものは

(二〇)

夏、いと暑きひざかりに、同じ男、

⑲夏の日の燃ゆるわが身のわびしさに水乞(みづこひ)鳥の音をのみぞなく

(二一)

かへりごとなし。

⑲歌が『平中物語』第二段の歌と共通することから、⑰歌と⑱歌の男は平貞文であることがわかる。伊勢への贈歌⑰でも、『後撰集』と同じように、「浜千鳥」「跡」「踏み」が縁語として用いられ、「跡」は「文字」を表し、「踏み」には「文」が掛けられている。⑲歌の「水乞鳥」は水に映る自分の影におびえて水が飲めない鳥で、「水」には「見つ」とだけ答えた女のあだな「みつ」が掛けられている。『平中物語』の第二段には、『伊勢集』の詞書とほぼ同じ状況が語られ、『伊勢集』の⑰歌と⑱歌の贈答がなく、⑲歌があり、『伊勢集』には「かへりごとなし」とあるが、その返歌もある⁽¹⁾。

また、この男の、懲りずまに、いひみいはずみある人ぞありける。それぞ、かれを憎しとは思ひはてぬものから、返りこともせざりければ、「この、奉る文を見たまふものならば、たまはずとも、ただ「見つ」とばかりはのたまへ」とぞいひやりける。されば、「見つ」とぞいひやりける。男やる。

⑳夏の日に燃ゆるわが身のわびしさに「みつ」にひとりの音をのみぞなく

また、返りこと、

㉑いたづらにたまる涙の水しあらばこれして消てと見すべきも

『うつほ物語』の実忠と「平中」(内藤英子)

のを

⑳歌には、「夏の日の「日」に「火」、「みつ」に「見つ」と「水」、「ひとり」に「独り」と「火取り」が掛けられている。『伊勢集』の⑲歌には、初句「夏の日の・四句「水乞鳥」とある。四句は仮名では「みつにひとりの」(『平中物語』)と「みつこひとりの」(『伊勢集』)となり、誤写や異伝歌の可能性もあり、同一の歌と考えてよい。また、『伊勢集』には返歌なしとあるが、本来『平中物語』の⑲歌はあったが、記されていないだけと考え⁽²⁾、『平中物語』に『伊勢集』の⑰歌と⑱歌の贈答がないのも同様の理由と考える。

『うつほ物語』において、『平中物語』は、この第二段の「見つ」問答が二度引かれている。一例目は、春日詣巻で仲澄からあて宮への贈歌に「人知れぬ涙の川とながるるをいかで溜れるみつと答へぬ」と詠まれている。「みづ(水)」と「見つ」の掛詞も⑳歌と同じである。二例目は、国譲巻で新帝が藤壺(あて宮)に贈った手紙の中で、「度々のを、『見つ』とだにあらざりしかば」と引かれている。二例とも伊勢の立場の女性は「あて宮」で、今回の実忠の相手の女性も「あて宮」である。実忠歌⑬歌は、そのあて宮からの「見つ」と「文」とのエピソードを、「浜千鳥」という歌語を用いて、実忠物語の中に引いているのではないだろうか。前述した実忠歌①にも「憂きことを思ひ入るとはなけれども深き山辺をいくら見つらむ」と、「見つ」に「満つ」が掛けられ「水」も響いていた。あて宮求婚譚の中では、仲澄と実忠の二人だけがこのエピソードを引いている。どちらもあて宮入内後、瀕死状態となるのが共通し、仲澄は死に、実忠は生き残る。「浜千鳥」の贈答や「見つ」問答が、『伊勢集』『平中物語』からの直接引用ではないにしても、当時の歌語りなどによって人々に共有されていたとすれば、このような

背景があることで、実忠に平中、あて宮に伊勢を重ねることができ。平中のように、実忠があて宮に翻弄され続ける求婚者であることは、悲劇的ではありながら、どこか「喜劇的な色彩」¹³を帯びていると言える。

実忠物語には「鳥の喩」が多いが、『平中物語』においては九十首中十首に鳥が詠まれ、その中で平中の詠んだ歌は七首で、実忠と同様、平中は鳥との結びつきが強いと言える。詠まれている鳥は、「ほととぎす」が三首、「群鳥」と「鶴」が各二首、「水鳥」「逢坂の木綿付鳥」「うぐひす」「飛ぶ鳥」が各一首で長歌に二種類の鳥が詠まれているため、十一首となっている。この中で『平中物語』第七段で詠まれた「群鳥」は、群がっている鳥を意味し、『源氏物語』より前の用例は二十七首ある。散文作品の和歌では、『古事記』一首、『平中物語』二首、『蜻蛉日記』二首、『うつほ物語』四首の九首のみで、『源氏物語』には、和歌の用例はなく、総角巻の地の文で「明かくなりゆき、群鳥の立ちつまよふ羽風近く聞こゆ。」と用いられているだけである。このような言葉の用いられ方をみると、『平中物語』『蜻蛉日記』『うつほ物語』の背後にある共通の文化圏が想定され、その影響関係とともに成立時期も考えられるのではないだろうか。『平中物語』の成立時期について、平貞文の延長元(九二二)年没後まもなく成立したとする説もある¹⁴が、その表現の特色からもう少し後の『後撰集』成立前後で『大和物語』や『蜻蛉日記』成立より少し前の成立ではないかと考えている。

四 「山彦」

近江の国、志賀の山もとに住まいを移した実忠の北の方は、菊の宴巻で実忠と再会する。「近江」は「逢ふ身」と掛詞でよく用いられ、再び出会う土地として、近江の志賀が設定されている。ただし、実忠は

最後までその女性が北の方とは気づいていないが、その場面で効果的に用いられているのが「山彦」という歌語である。まずは、その再会場面をみたい。

源宰相、思ほしわづらひて、山林にまじりて、山々寺々に不断の修法行はせつつ聞こえたまへど、御返りなしと嘆くこと限りなくて……源宰相、なほすべき方覚えねば、比叡に上りて、あるが中に験かしき所に……行はせ、みづからは中堂に、七日七夜加持の潔斎をして、五体を投げて、「このことなしたまへ」と行ひたまふ。

かかるに、かの真砂子君の母君、……いかで人も寄らざらむ所にあらむとて、志賀の山もとにぞありける。……源宰相、かのこと果てて帰りたまふに、藤中将仲忠も志賀に籠りて、同じやうなることして帰り出づる。比叡辻にて源宰相見つけたまひて、……宰相、「などかものたまふ人もなき。もしかたは人の住みたまふ所か」とて、

② (実忠)「山彦も答ふるものを夕暮れに旅の空なる人の声には

あやしく、などか世離れたる住まひはしたまふ。思ふ心なき人々好かずや」などのたまふ。(菊の宴②九二―一〇五)

実忠は、あて宮の入内が決定した後も、あて宮への思いがかなうようにひたすら神仏に祈願をする。実忠の妻子が隠棲した「志賀の山もと」は琵琶湖の西南部に位置し、比叡山に連なる山々の麓である。「比叡辻」とは、比叡山と志賀寺へ行く道の分かれ道を意味し、そこで偶然比叡山で潔斎を終えた実忠と、志賀山寺での祈願を終えた仲忠が出会った。二人は風情ある家の垣根の紅葉に引かれて、家の中に入るが、そこは実忠の妻子の住む家であった。実忠の詠ずる歌を聞き、夫と認識した

北の方は、夫に悟られないため、家の者に声を出させないようにする。夕暮れ時で「たそかれ」と問われることもないと言を詠みかけても、何の返事もないので、実忠は②歌で、「山彦」もすぐに答えるのに、この寂しい夕暮れに、旅人の声には答えてくれないのかと返歌を求めている。実忠歌で詠まれた「山彦」は、本来は「山の男神」を意味するが、歌語としては、「人が出した声₁₅が山に反射して返ってくる」「こだま」を意味する₁₅。

②つれもなき人を恋ふとて山彦の答へするまで嘆きつるかな
(恋一・五二一)

④打ちわびて呼ばはむ声に山彦の答へぬ山はあらじとぞ思ふ
(恋一・五三九)

「山彦」の和歌での用例は、平安時代に一五四首ある。その中で『古今集』には、四首あり、②④歌のように、恋人に答えてほしいという形で、恋の初期段階に詠まれることが多い。散文作品の和歌では、四作品にしかみられず、『うつほ物語』に六首、『平中物語』に四首、他に『蜻蛉日記』一首、『多武峰少将物語』三首あり、『源氏物語』以降にはみられない。また、『古今和歌六帖』には歌題「山彦」があり、全体では十八首あり、十世紀半ばから後半にかけてよく用いられた歌語と言える。

⑤山彦の答へありとはさきながらあとなき空を尋ねわびぬる
(蜻蛉日記) 道綱母

⑥声高くあはれと言はば山彦のあひ答へずはあらじとぞ思ふ
(多武峰少将物語)

『蜻蛉日記』の道綱母は、左遷された源高明の妻であった愛宮に、その同母兄の藤原高光からと使いに嘘を言わせて歌を贈った。⑤歌ではその歌への愛宮の返事を「山彦の答へ」に喩えてそれが道綱母に届か

『うつほ物語』の実忠と「平中」(内藤英子)

ないことを詠んでいる。⑥歌のある『多武峰少将物語』は藤原高光を主人公とする物語で、「多武峰」は高光が出家した山を指し、その関連で⑤歌⑥歌ともに「山彦」が用いられている。歌語「山彦」は、実在する「山」があり「山彦」が実際に聞こえる状況や設定で詠まれている。次に『うつほ物語』の六首をみる。

⑦山彦も答へぬ空に鳴く鶴は天の河原に一人臥すかな
(春日詣・兵部卿宮)

⑧山彦も答ふるものを夕暮れに旅の空なる人の声には
(菊の宴・実忠・再掲)

⑨山彦の答へざりしを声々にまだ白雲と騒がれしかな
(国譲下・今上帝)

⑩白雲も色変はりぬと聞きしかば山彦もいかが答へ憂からぬ
(国譲下・藤壺(あて宮))

⑪唐土の山の山彦聞きつけてそよやといふまで響き伝へん
(楼の上下・仲忠)

⑫山彦はそよやといふとも調べ置きし人なき宿を見るかひもなし
(楼の上下・俊蔭の娘)

『うつほ物語』の和歌での用例は、⑦歌から⑩歌の恋歌の場合、恋人の返事を意味し、「山彦」の「山」から「空」、さらに「空」から「白雲」という連想により詠まれている。⑪歌と⑫歌の楼の上下巻の仲忠と俊蔭の娘の親子の贈答では、本来の山での声の反響「こだま」として詠まれている。地の文にも嵯峨の院巻に一例あり、あて宮の姉の八の君が、同母兄仲澄のあて宮への懸想に対して「声せぬに答ふるものは山彦の、とのたまへかし」とあて宮に助言している。この発言には前述した『古今集』の④歌が引かれている。一方『平中物語』には次の四首がみられる。

③③ (平中) ……山彦の 答へばかりは 答へなむ 聞きて慰む ことやあると 時をいつとは わかねども せめてわびしき 夕暮れは むなしき空を ながめつつ…… (三段)

③④ (平中) うぐひすの声のはつかに聞ゆるはいづれの山になく山彦ぞ (六段)

③⑤ (平中) 問ひければ答へける名をささなみの長等の山の山彦もせぬ (七段・再掲)

③⑥ (女) ささなみの長等の山の山彦は問へど答へず主しなれば (七段・再掲)

第三段で平中が身分の高い女性へ贈った長歌③③には、女からの返事はなくとも「山彦」なら答えてくれるだろう、それを聞いて慰むことがあるかもしれないが、とくにつらい夕暮れはあてもなくもの思いにふけりながら空をながめることだと詠まれている。第六段の③④歌は、「逍遙しにとて、なま田舎へいにける」際、鶯が鳴いて詠まれた歌で、かすかな鶯の声に恋の憂いによる自分の忍び音を重ねて聞いている。第七段の③⑤歌は、二月に志賀寺に参詣した際に詠まれた歌で、平中が返事をくれないことを責めると女は③⑥歌で「山彦」には実体がないので答えることができないと切り返している。長歌③③は、実忠歌②と「山彦」「夕暮れ」「空」の三語が重なっている。平中の長歌③③は、平中に釣り合わない身分の高い女性に贈った歌で、『平中物語』唯一の長歌である。また、『うつほ物語』で長歌を詠むのは、実忠とその北の方の二人だけである。平中の③③歌と③⑤歌は、実忠と同じように、『古今集』の②④歌が引かれ、「山彦」は山に反響して必ず答えがあることを前提として詠まれている。実忠と平中の歌の共通点は、志賀という山に囲まれた土地で、山彦のあることが当然とされる状況で詠まれていることにある。「浜千鳥」に関する「見つ」のエピソードも返歌または返事を求

めているが、「山彦」という歌語も「答へ」を求めている。その点では二つの歌語には共通点がある。

五 平中と近江

『平中物語』には、三十九段中九段に「近江」に関する歌枕が記され、近江を詠んだ歌は全体で十八首ある。具体的には、「逢坂(あふさか)の関」と「近江(あふみ)」に関連する歌枕の詠まれた歌が各六首あり、いずれも「逢ふ」の掛詞となっている。このほか「長良の山」が二首、志賀寺付近の山の紅葉の贈答歌が二首、琵琶湖に生息する「群鳥」などの鳥に関する歌などがある。その一例として、前述した第二十五段をみたい。

また、この男、志賀へとてまうづるに、逢坂の走井に、女どもあまた乗れる車を、牛おろして立てたりければ、……かの逢坂の関越えて待つ。来けるあひだに、車よりかかることぞいひたる。

③⑦ (女) 逢坂の名に頼まれぬ関川のながれて音に聞く人を見てかかりければ、あやしと見て、さすがに来て、男、返し、

③⑧ (平中) 名に頼むわれも通はむ逢坂を越ゆれば君にあふみなりけり……

近江の歌枕「逢坂の関」に関する名所や地名が第二十五段の和歌や地の文に散見する。③⑦歌は、当時すでに好き者として名高かった平中に女から詠みかけた歌である。平中は③⑧歌で「逢坂」と「近江」の二つの語に「逢ふ」という意味を掛け運命的な出逢いを強調して返歌している。

一方『うつほ物語』においては、「逢坂」の用例は内侍のかみ巻に三首あり、朱雀帝と俊蔭の娘に交わされた贈答歌にのみみられる。

(朱雀帝) ほのかにもゆふつけ鳥と聞こゆればなほ逢坂を近しと

思はむ

(俊蔭娘) 名をのみは頼まぬものを逢坂は許さぬ関は越えずとか
聞く

(朱雀帝) 頼めども浅かりければ逢坂の清水も絶えて結ばれぬか
な

非日常的な幻想空間で行われた贈答のため、現実世界で二人が「逢ふ」
ことはない。「近江」については、「近江守」を含めて地名を表す用例
がなく、「逢ふ身」と掛詞での用例は見出せない。

平中(平貞文)は、延喜十(九一〇)年正月三河介に任ぜられたため、
三河国を含む東国へは何度か赴いたことがあったと思われ、その時の
通り道が近江であった。また、寛平五(八九三)年二月に右馬権少允、
延喜十七(九一七)年五月には右馬助に任ぜられている。『延喜式』卷
四十八によると左寮の管轄ではあるが、近江国に「甲賀牧」があり、
右寮の平貞文も訪れたことがあったかもしれない⁽¹⁶⁾。このように、
平中はその官職からも近江と関わりが深いと言える。

実忠が近江に関わりが深く描かれる理由として、平中との関わり以
外にも、琵琶湖西岸が畿外ではあるが、京の都から近距離であることや、
志賀寺を創建した天智天皇による近江京という旧都があったこと、屏
風絵によく描かれる名所であったことなどが考えられる。さらに、大
嘗会和歌の悠紀国が近江の国であったこともその理由として考えられ
ないだろうか。大嘗会和歌は、勅撰集では『古今集』に五首、『拾遺集』
には二十一首入集しており、『拾遺集』の多さは突出している。つまり、
『拾遺集』編纂当時において、大嘗会和歌の評価の高かったことがわか
る。歌枕を数多く詠み込む大嘗会和歌において、宇多天皇以降、悠紀
国は近江の国が固定となり、その地名は大嘗会和歌に繰り返し詠まれ
ている。大嘗会和歌の悠紀国の詠者としては、河原院周辺歌人の大中

『うつほ物語』の実忠と「平中」(内藤英子)

臣能宣、平兼盛、清原元輔らが選ばれている。その河原院周辺歌人の
一人である源順は、安和の変で左遷された高明との関係が深かったた
めか大嘗会和歌の詠者選ばれず、「官たまはらで、近江のやすのこほ
り」(『安法法師集』詞書)に住んでいた。その順は『うつほ物語』の
作者として有力視されているが、近江に詳しく、鳥の習性や生態など
を熟知して歌に詠む博識な人物である点でもその可能性は高い。

おわりに

『平中物語』の第一段にみられる平中の人物像を始めとして、第二段
の伊勢と思われる女性との「見つ」問答、第三段の高貴な女性への長歌、
第七段の志賀寺参詣など、多くの段が実忠物語に影響を与えている。
実忠が近江と関わりの深い人物として設定されているのは、物語の始
発時には、平中の人物像に重ねて描こうとしていたのではないかと考
える。実忠は、有力な求婚者として登場するが、一度めの志賀寺参詣は、
仲澄の思慕が記された後に位置し、仲澄と同じ『平中物語』二段「見つ」
問答を意識した贈答がなされ、あて宮との結婚の可能性のないことが
示唆されている。菊の宴巻までも実忠の妻子の存在を比喩的に読み
取ることが可能だが、菊の宴巻で改めて妻子ある男として設定し直さ
れ、過去が語られる。あて宮入内後、物語後半にいたって、実忠は畿
外の近江の志賀から畿内の山城の小野に拠点を移し、実忠自身にその
意志はないが、政治的に必要とされる存在になる。

本稿で取り上げた「浜千鳥」と「群鳥」「山彦」などの共通語彙から、
『平中物語』と『蜻蛉日記』、『うつほ物語』の成立に関わった文化圏は
共通しているのではないかと推測することができる。これについては
今後も引き続き検討していきたい。

*本文引用は、『うつほ物語』『平中物語』『蜻蛉日記』『枕草子』『梁塵秘抄』『古来風躰抄』は新編日本古典文学全集、和歌は新編国歌大観による。私に適宜表記を改めた箇所がある。

注

- (1) 本宮洋幸「実忠物語と求婚和歌」『うつほ物語の長編力』新典社、二〇一九年。
- (2) 大井田晴彦「実忠物語の位相」『うつほ物語の世界』風間書房、二〇〇二年。
- (3) 注(1)に同じ。
- (4) 室城秀之「うつほ物語全」おうふう、一九九五年。
- (5) 室城秀之「あて宮求婚譚のなかの、地名を詠んだ歌をめぐる」『うつほ物語の表現と論理』若草書房、一九九六年。
- (6) 萩谷朴『平中全講』私家版、一九五九年。
- (7) 平中歌に詠まれた「ながらの山」の用例は、『源氏物語』より前で、『平中物語』以外、『後撰集』雑三に詠み人知らずの歌一首『拾遺集』神楽歌に大中臣能宣の歌一首、『兼盛集』・『好忠集』に各一首で合わせても四首しか詠まれていない。『後撰集』以外の詠者が、能宣・兼盛・好忠と河原院周辺の歌人詠であることに注目したい。
- (8) 注(6)に同じ。
- (9) 齋木泰孝「うつほ物語」のあて宮求婚譚と実忠物語—「藤原の君」における志賀寺参籠について—『論考平安王朝の文学』新典社、一九九八年。
- (10) 平貞文の⑬歌は『蜻蛉日記』の兼家の歌「浜千鳥あとも渚にふみみぬは我を越す波うちや消つらん」と言葉の類似が多く、また、兼家が近江の女性と交際していたこと、後の道綱母の養女として迎え

られる姫君が志賀で生まれ育ったことなど、平貞文の歌や『平中物語』と実忠物語、『蜻蛉日記』には影響関係がみられる。また、『蜻蛉日記』にはこの歌以外にも「浜千鳥」を詠んだ兼家と道綱母の贈答歌があり、道綱母にとって、「浜千鳥」は兼家との結びつきが強い歌語と言える。

(11) 平野由紀子「伊勢集」『平安私家集』岩波書店、一九九四年。「伊勢集」二十一番歌の注に「男たちからの求愛を拒絶する伊勢を造形する意図を読みとるべき」と指摘がある。

- (12) 注(11)に同じ。
- (13) 注(2)に同じ。
- (14) 注(6)に同じ。
- (15) 片桐洋一「歌枕歌ことば辞典 増訂版」笠間書院、一九九九年。
- (16) 曾田文雄「『平中物語』の和歌三つ」『平中物語』研究と索引』溪水社、一九八五年。

*本稿は、二〇二二年一二月名古屋平安文学研究会での発表をもとにし、その際ご教示いただきました先生方には厚く御礼申し上げます。